



## 東日本大震災直後の手紙

志賀理江子

2021年3月11日で、東日本大震災から10年が経つ。最近はとくに、あの日の自分の行動と感情を細かく思い出したり、夢を見て泣いたり、目の前で消えていった人達のことを考えたりが増えたように思う。この10年を、たった1日のように感じる日すらある。それはなぜか。震災直後のあの頃、もっともっと深く、様々なことに翻弄されず、自分の頭で考えながら動けたことがあったかもしれない、と後悔に似た複雑な気持ちを強く感じ始めているからだ。震災後、復興事業という名の、数々の抗い難い経済活動や、義援、助成、補助、保障という名のありがたいとしか言いようのない行政政策は、集落と人々を救った。仮に、完全に着の身着のままのあの頃の私達だけで生活を再建しなければならないほど国が追い詰められていたら、はたしてそれは、この集落にとってどのような10年になっただろうかと、考えることすらある。死者は確実に増え、あらゆることが残酷に違いない。しかし、もしかしたら、自殺はなかったかもしれないし、亀裂も生まれなかったかもしれない。老いた人たちの知恵がいかされたかもしれない。でも、全部逆かもしれない。そんな混乱が私を襲う。とにかく時間を巻き戻すしかないこの私の心身の状況を、ある意味情けなく思いながら。



\* 『螺旋海岸notebook』（赤々舎、2013年）より一部転載

## 消えたか否かいまださめぬ

4月5日 心配してくださったみなさまへ

私の住む集落（約370名）では53名が亡くなりました、現段階で7名はまだ見つかっていません。津波は自然のありのままの姿だったと思います。恐怖の限界を遥かに超えていました。だからあの恐怖の絶頂で息絶えて流されたたくさんの人のことを思うとなにも考えられなくなる。どんな苦しい思いで水にのまれて意識を失っていったのか、一人ひとりのことをどれだけ想っても届くことがないです。

ただあの日一瞬だけ、時間、生、死、感情、物の価値などが崩壊して、そこにあったすべてが見渡す限り真っ平らになった。そして大雪が降って真っ暗な夜になりました。ラジオで沿岸部では数百人の遺体が見つかったと知り、ここから約80キロしか離れていない福島第一原発の事故の状況が繰り返し流れるなか、揺れつづける地面の上でいろいろなことを覚悟した。私は体がはち切れたようで、あらゆることに違和感を感じなかった。けっこうどうでもいいことが次々頭に浮かんで来て、体というのはこういうものかと思った。

そしていま、あの均一な暗い夜を取り戻すことばかり考えて、二度と絶対に嫌だけど、でも同時にあの時間が体から消えてしまうのが怖いのです。

一方で、避難所で一緒に生活してたくさん気遣ってくれるたくましいおばちゃんたちの「もの」への価値観に寄り添うと、かなり救われるし安心するし、泥の中から写真が一枚でも見つかるとうれしいのも事実です。私が必死に探している「写真」を泥の中から見つけるとむちゃくちゃうれしいのです。でも写真も家も人も同じ泥の中にある。「もの」の価値というものが均一になっている現実が目の前にある。そこはきっと私のなかで暗い夜につながっている。だからそれらは引き裂かれてここにあるのかなと思います。それでいい。

私が全身で確かめなければならないのは、2008年の11月からここで自分が始めたことはいまこの瞬間に着地する話ではないということです。つまりそれは一緒に流されてしまえばよいだけの話なのかどうか。私は物にまみれた生活をしていたので、流されても困らない物がたくさんあった。普段の生活で感じていた違和感が、あらゆる「もの」の価値から発生していた一面があったとしたら、自分の欲望のカスのようなものも流れていったのかもしれない。その事実には私は愕然とした。けれども、一瞬でも尊いと直感的に思った暗い夜は、私のこれまでを、たんなる物への欲望とつなげて考えるなと言ったような気がした。というか、私は自分にそう言い聞かせたのです。

原発事故については情報が少なすぎて、避難所ではまったく話題にあがりません。メディアも伝えるべきことを伝えないけれど、私たちもその話をこの場で避けている。みんなの体が映像に耐えられないのかもしれない、いまこれ以上の大変な事態を考えることが不可能で受け入れられないのだと思います。私はこの問題を無関心に電気を使いまくって生活していた自分のせいでもあると思った。

いろいろと書きたいことがあるのですが際限がなくなってしまうようなので。心配してくださって本当に感謝しています。

---

あの日誰もが様々なかたちで被災しています。その細かな一つひとつを、一般化して考えたりすることができないんです。被災のレベルの差、個人差はとても残酷で、あらゆる誤解を生みそうで、今日の私の話には違和感を覚える方もいるかもしれないし、それによって誰かを傷つけたりしないだろうかとても怖いのですが、ただ、北釜の歴史が大きく変わったということは避けて通れなくなってしまった。だから今日は、私がどういう体験をし

て、どう思って向き合っているか、ひとりの視点からの近況報告として聞いていただけたらありがたいと思います。

震災の夜、幼い頃から日常の生活のなかですっと感じていたある種の違和感が、突然なくなった時間がありました。それは見渡す限り真っ暗で、あらゆる価値がキーンと真っ平らになったような世界で、むちゃくちゃ怖かった。もともとの社会がどう機能していたかにかかわらず、私が体験したのは、一瞬でもそれらが直接的に破壊され崩壊するようになるということでした。私はその「違和感がない」世界を、写真の行為によってずっと求めていたのではなかったのか。でも震災の夜の、恐怖と吐き気だけという最悪の気持ち悪さによって見事にその大きな隔たりに気づかされたのです。それでも私は、あの真っ平らで真っ暗な夜を尊い時間として忘れたくないと思った。たくさんの死んでしまった一人ひとりの最期の時間のことを考えてパニックになりながら、あのときは自らに誓ったと思う。でもそれよりももっと大きなものがその後押し寄せきて、それはまるで時間が巻き戻っていくようにあらゆる価値が、その均一な世界からぶわっと噴出して自分を圧倒していったことです。だからあの夜はどこにつながるのだろうかといつも探している。いまになっているいろいろなことを思い出します。

---

屋根の上に逃げたおじさんが、「海がや、朝方遠くに見えた海が、いままで見たこともねえくらいに澄んで異常に美しいつうか、きれいだったっちゃ」と言いました。また別の人は、「星がすごくきれいでね、上ばかり見てずっと見とれてた」とも言った。ある人は「波はすぐに引かないんだ、渦巻くの。だから流れた人が意識を失っていくのを見ていきやいけない。全然手が届かない」と嘆きました。

「自分は貧しく育ったからどうしてもものが捨てられねえ。こうなったいまも惜しいと思ってしまう。死ぬときはなにも持っていけないのにな」と大事なものを探して歩いていた人もいました。私はその傍らで、借りたカメラを持ってさまよっていました。日々集落の風景がすさまじい勢いで変わってってしまうから、とにかく記録しなくてはと焦っていたんです。記録を撮ることが私に唯一できること。そうしなくてはならないという気持ちがあるときの私を精神的かつ現実的に支えてくれてすごくありがたかったけど、同時に嫌気がさすほどがっかりもしました。写真を撮ることがまったく救いにつながらなかったし、撮った写真について、なにも思わなかったからです。

市役所で知らない人に「ちょっとちょっと」とガツと腕を掴まれた。その人は、「いま覚醒した。自分は騙されている。俺らが着ている服なんだと思うか？ ビンゴ！ 死んだ人の

服だ。自分はここから脱走する。おふくろが生きているから俺は実行する。なんぼ生きてたって金がねえなら意味がねえ」と叫ぶように言い放ちました。

またある人は、「娘も妻もずいぶん走って逃げたんだ。水の中でもがいたと思う。手術の跡などないのに体がそうだった。おれだけ残ってどうすんの」と家族の遺体のことを話した。それで私が泣くと「みんなそうなんだから泣いたら恥ずかしいんだよ」と言いました。私はこの世の誰も生き残らなかったらよかったと衝動的に思った。

自分の家を確認するために、避難所からみんなでバスに乗って北釜に向かいました。隣に住んでいたおばあさんと一緒に家の跡地を見ていたとき、「味噌と糞、一緒になって流さって見分けつかねえっちゃー」と彼女が言うので二人で爆笑し、別の人は、買ってから15分しか見ていない新しいテレビが流されたことを「もー」なんてあきれ顔で話し、また別の人とは家のなくなり方を「いやー、うちもきれいになくなってたけど志賀ちゃんちもきれいださ」と讃え合い、救援物資の服を私が着たら「いやー、垢抜けたんでねえの」と褒めてくれ、おじいさんが腰ではなくジーパンをはいてイケてる感じになって、「若返った」って腰を振って言うので笑った。避難所にはマイクがあって、面会の人があると、それがたとえおじさんでも「〇〇さん、き・れ・い・な女性の面会です」なんて受付係の人がマイク・パフォーマンスをして、「ヒュー」みたいな感じで冷やかされて拍手が起こったり、「次、津波来たら自分は羽がおがって飛んでいく、問題ねえ」って言ったり……。そうやってむちゃくちゃ悪い冗談みたいに、辛いことを笑い飛ばすように話しました。悲惨なことがたくさん襲ってきたけど、避難所ではそれに追いつくようにみんなで腹を抱えて笑い合ったと思う。つねに冗談を言うように誰もが努めていたし、実際そういうことにとでも助けられました。

ひどく痩せてしまった人がいたり、ぼーっと焦点が定まらないような感じになってしまったようすを見かけたりもしました。笑い転げたと思ったら涙をこぼす、もしくはずっとぼーっとしているという感情の振れ幅のなかで日々みんなが生活をしています。大きな力が働きすぎて悔やんでも意味がないし、しょうがない、あきらめるしかないという気持ちが働くからどうにか普通でいられるのかもしれない。

本殿がかるうじて残った下増田神社の丘に立つと、更地になった北釜が360度見渡せるんです。世話役のおじいさんは、「この神社が建った1200年前はどんな風景だったんだべな。毎日ここに立つたびに1200年前のことを考えるっちゃ」と言いました。

自分の土地に住めなくなるというのは、いったいどういうことなのか。移動ばかりしていた私の生活感覚ではわからないことのほうが多いんです。先祖代々北釜に住んできた家が多く、この土地との断絶が今後の彼らの生活にどう影響していくのかは、まだわかりません。避難所や仮設住宅から北釜に通い、歩き回って写真を撮るのですが、最初はいつ地震が起きてまた津波が来るかとすごく怖いんだけど、日が経つにつれ体が慣れてくるのです。更地になったいまでは、震災を意識しない時間のほうが長くて、自分のアトリエがあった場所にぼーっと立っていることもあります。忘れるということをして全身全霊で行なっていると感じます。それぐらい一瞬で運命なんか変わるんだということを経験したのだけでも、今後の生活をどうするのかというとても重い課題がみんなのなかにある。いまは、将来について少しずつ考えることができるようになってきた時期だと言えるけど、しかしそれもまた同時にいろいろな困難を明らかに突きつけられるから辛いのです。

---

そして「復興」という名のもとにすさまじくたくさんの方が起こります。「復興」という言葉を一日に100回は見たり聞いたり考えたりするけども、影に隠れて見えないことはとても多い。

---

ある日突然スーツを着た人たちが高級車でやってきて、夢物語のような復興計画をたくさん話したことがありました。「これさえ実行できればすべてがよくなる。前よりももっと豊かになる。雇用も生まれて苦しい思いをしなくてすむ。あなたを助けたい」と言って豪華なお弁当を配った。お弁当の蓋を開けたときのみんなの「おおー」というどよめきは私の脳裏に焼きつきました。またあるときは、津波や被災地の映像がふんだんに使われた復興計画ビデオが大きなスクリーンにドラマチックな演出で流されたりもしました。その行為や発せられる言葉一つひとつが善意に満ちていたと思います。でも、集落がたくさんのもを失ったことは彼らにとってはよいタイミングだったのでしょうか。私もこういった計画が本当にこの土地に住む人たちを末長く救って支えてくれるのかどうか真剣に考えるのだけど、ひとりで考えてもわからないのです。だからゆっくりみんなで意見を交換し話し合っこの復興計画の奥にあるものを探り、検証して、将来を見つけていきたいと切望したのもつかの間、そういう空気さえつけれないように、私たちが望む望まないにかかわらず、ここの住民ではない推進者の周到な計画にすべてを急がされたのはすごく悔しいことでした。

私はとにかく、この大きな資本の復興計画に翻弄されることで、将来の生活をまず自分たちで考える力を奪われてしまうかもしれないことがとても怖かった。というのも、北釜の

人たちの生活の知恵や工夫は、暮らしの隅々にまで浸透していて、私自身たくさん教わったからです。

こういうことに対して賛成、反対、よくわからない、働かなくてはならないからゆっくり考える暇がないなど、それぞれの意見や立場があります。それは被災のレベルや、これからの人生がそれぞれに違うのだから尊重されるべきなのです。しかしその違いによって、コミュニティに亀裂が生じてしまうこともあると思います。大きな資本は、個人の価値観を剥き出しにさせた結果生まれてしまった影のようなものを私たちのなかに置いていて、後は誰かわからない人がその壮大な計画を進めていくのです。私は目の前で「善い人」がただ黙って、すべてを受け入れさせられる光景を見ているかのようだったし、「金」というものを前に崖から突き落とされた気持ちになって、被害妄想が膨らんでしまったこともありました。私のこの不安感が、なにか立派な「哲学」や「倫理観」のようなものにつながるとしても、それを日々の自分たちの暮らしに直接的につなげて混じり気なしに存在させるのは難しいことだと思います。少なくとも自分は自分に対しては正直でいたいし、よくないと思うことはできればやりたくない、やるべきではないと願う「気持ち」や、様々な経験から培うことのできたあらゆる「考え」が、日常で徹底して実践できているかというウソです。だらけてしまったり、過ちを犯したり、自己中心的になったり、面倒だからまあいいかと妥協したりいろいろです。

それゆえに、いまここにあるたくさんの矛盾、瞬間瞬間になにをどう判断し選ぶかなど隅々にまでその「考え」がいきわたるようにするには、変えなければならない魂がある。けれども、その根底にある「哲学」や「倫理観」は本当は立派で近寄りがたいものなのではなく、「触れたいか、触れたくないか」という人間の生理的な感覚でもあると思うのです。そう考えると、ある種の業のような怠惰や野蛮さも生きるうえで大事なのもかもしれない。だから、本当に難しいのはどうやってこれから生活していくかということです。

---

誰もがよかれと思って、正しいと信じてやっている。誰も悪くないのです。

---

私はこれが資本主義の始まりなんだと思いました。社会の成り立ち、金の意味、政治の根だとも感じました。そしてこれらが欲望のいきつく先、人間がすること、目の前の現実なのだを知りました。それぐらい大きな資本は容赦なかった。でももっと恐ろしいのは、私がこれまでなにも知らないままこれらに加担するような生活をしてきたかもしれないことです。自分の欲望の矛先はどこに向かっていたらうか、あらゆる情報や個々人の欲望が

コントロールされている社会の存在。その構造すら知らなかったし知ろうとしなかったと思います。

だとしたら、その欲望とはなにか。なにに支配されたことを言うのか。守るべきものの存在だろうか。貧しさか、飢えだろうか。飢えだとしたらそれは「自然」につながっているはずです。では生きていくことそのものだろうか……。善悪に分かれ道はなくて、その裂け目はぐちゃぐちゃになってなにも見えないんです。善がなかったら悪もない。そして、私の写真への信仰は欲望なのか。いまここにあのときと同じ津波が来てすべてを流し去ったとしたら、その残骸は、芸術だろうがあらゆる欲望だろうが一緒じゃないかと疑ってしまうほどです。私がよかれと思ってやるのが、ある人にとってはそうでなかったり、配慮が足りなくて失敗してしまったり、そんなことばかりです。

新聞やテレビなどのメディアも容赦なかったと思います。その影響力がとてつもなく大きいことを改めて知らされました。編集され記事になる。ならない。それによって注目される。無視される。編集によって人と人とのあいだに隙間が生まれてしまった。

一方でそれらの情報を必要としてメディアに頼る自分の生活があるし、なによりもまず私は写真を撮る人なんです。

---

土地に戻れないいま、こうして生じたコミュニティのなかの影はそのままに大きくなるばかりかもしれない。土地という力は、そういう隔たりを無意識のうちに修復するつなぎ目、母体のような役割があると思います。ずっとここに住んでいて、これからもここに住むということは、人をある一面で強くする。

……とにかく、この社会との関係のうえに成り立つ生活で、私はいま生かされています。だから、こことどのような関係を結んで今後生きていくかを真剣に考えます。そしてそこから生まれた私なりの哲学のようなものを一生かけて行なっていくことが、あの日存在した均一で暗い夜を、あらゆる違和感がなくなった瞬間を、自分の体から失わないでいられる方法なのだと思う。私はそういうことを少しでも考えられる機会に恵まれたのだからそのことを無駄にしたくない。

---



避難所や仮設住宅でたくさんのもをもらいました。様々な国や団体や個人から、義援金、冷蔵庫、洗濯機、テレビ、電子レンジ、ポット、エアコン、ベッド、布団、カーペット、食器、湯たんぽ、服、食料、カメラ、散髪サービス、体操教室、喫茶、マッサージ、炊き出し……。感謝してもしきれないほどでした。だから「これをいい機会と考えて立ち止まって、よくしていくチャンスなんだ」って近所のおじさんは言ったし、また別の所では「もう、ありがたい言葉ひとつ言わなくなった。自分らが情けない、がっかりだ」って嘆いた人もいたんですね。

このあいだひさしぶりに、北釜でお世話になったあるおばあさんと話す機会がありました。彼女は、「わたしね、ここが好きだから、またね、石を拾って、それを積むことから始めたいの、だからそれができるようにいまは草取りしてる」と言って更地になった家の周りの草取りに通っていました。彼女はあらゆる復興計画から自立して自分がどうしたいか自分の頭で考え、それを軸にしてその手で石を拾い、草をむしって、野菜を植えている。もうここには住めないことを十分理解したうえで本気でやっている。

社会と欲望の矛盾ばかりを考えてしまって、そのことになんじがらめになってしまった私にとって、社会の一部でどう生かされるかを考える前に、生きることの根底にある生活の小さなことを淡々と実行する彼女に目を覚まされるような気持ちになって、私も彼女のようになりたいと思った。そういう長い時間を生きてきた人、自然に寄り添った人が目の前にたくさんいることはすばらしいことで、教わるのが日々あるんです。食べものがないときは芋の蔓を食べたこと、堆肥をつくり背負って売りにいったこと、暗くなったら寝て日が射したら起きること、道ばたに花が咲いているのを見たらうれしくて疲れが吹き飛ばすこと……。彼女が昔のことを話してくれたことを必死に思い出します。

---

この震災が自分になにをもたらしただか、北釜での経験によって私は世界の情勢や環境が、実際にどんな危機にあるのか実感をもって想像できるようになったと思います。いま現在、私たちの住む社会が物質的に豊かな反面、ある限界にきているとも感じます。その片鱗を感じるたびに、私は絶望的というより、とても静かな気持ちになるのです。そういうことを想像し、内なるなにかを鎮めてる。そうしたら私の欲望のようなものも、霧のように消えていくんだって少なからず思う。たくさんの方が助けてくれた事実にはすがりながら、ものが流されてなくなったことよりも、それ以前の、ものが増えつづけていく生活のほうに恐ろしかったと、食べるものに困らない、命の危険も感じない、ある意味では豊かな環境で育った私は錯覚するんです。

そして、北釜の人が遠くから私を見つけては手を振ってくれて話しかけてくれること。

「なにやってんの～。今度なにをつくるの～」って目を見つめてにっこり笑ってくれること。なによりもまずここにいさせてくれること。失敗しても許してくれること。その途方もない優しさみたいなものを彼らから受けるたびに、そのことがあまりにも尊すぎて体が破裂しそうになります。いろいろなところからたくさんの救いの手が私たちの生活に差し伸べられたことによって、この世にはその手が差し伸べられない領域がたくさんあることを実感します。どこかの国で助けられもせず死ぬ人がたくさんいるということ。そしてそれはどうしようもなくそういうこととしてあること。生きていることはあまりに強い。

だから、これらのことがどのように「芸術」とつながりをもつかなどは全然わかりません。

ただ私がこれまで作品の発表などを通じてお金を得て、この社会のなかで生きてきたことも確かです。それに対して絶望することなく、また静かな気持ちに収まることなく、いま「目の前にある現実」とつながるパイプを見つけなければと思うし、これまでの制作を遙か遠くのイリュージョンにしたいと思う。芸術に社会性があるのではなく、芸術が根を張る場所が社会だからです。そのベースとなる社会とどう結ばれているかが「作品」として重要なのだと思います。「社会」とはたったひとりの人という意味でもあると思う。でもこのことはますますわかる話ではないのです。

あの瞬間、写真を撮ろうなんてまったく思わなかったです。私は生きつづけるのに必死で、写真はまったく別の次元にあった。だから、そういう意味では、私のなかから芸術は消えませんでした。震災直後はその数週間のうちに起こったあらゆることではしゃいだのですが、しばらくすると夜、避難所で大好きな踊りのこととか、歌の歌詞とか、映画のワンシーンのことを思いながら寝たりしたんです。目を閉じれば、誰かがこちらに向かって歩いてくるのだとわくわくした。それははたしてどういうことだろう。私は自分の被災のレベルから考えて、それを想うゆとりがあっただけなのかもしれないけど、その時間は数分だったはずなのにはてしなく自由でした。「自由」というものがすーっと私のなかに入ってきてくれたような感じがして、身体がイメージで満ちあふれて満たされて幸せな気持ちになった。それはすごく人間らしいことです。現実逃避に心を奪われているのではないのです。私が心から想ったのは、混沌、悲惨で残酷で滑稽なぐちゃぐちゃな現実を根を張るもの。そしてその混沌から生まれる力を、それそのものとして扱い、生死を顧みずにごく個人的な美しい言葉で発すること。そこには嘘がないから、ただただ心に正直なだけだから、とてもおぞましいことを言うのかもしれないのに、私は満ちていく。その言葉によって人間の身体のありさまを、その宇宙を感じるができる。価値観というこの世の境界線にいるだけものと添い寝をするような気持ち。

---

怖いのに何度も北釜の海に行くんです、歩いて行ってまた戻って来るんです。波打ち際には朝も昼も夜も、たくさんの重複し矛盾する分厚い層のようなものが、ツジツマが合わな  
いままずっしり重なって行ったり来たりしています。

---

私はこの光景を美しいと思う。

---

動いているのは私ではなく、境界線のほうかもしれないと思うのです。